

わたしの聖戦

◎◎女性が働くことについて◎◎ 37

医学博士・医学ジャーナリスト 植田美津江

銭湯と文化

たまに温泉に行くと、見も知らぬ人々と裸の付き合いをすることになる。

今でこそ各家庭にお風呂が普及したが、一昔前は皆銭湯に通ったものだ。そこは温泉と同じように庶民のいいこの場として日常に欠かせないものであった。

銭湯には、多様な年齢・立場の人が集まってくる。人は誰でも年をとり、年をとるとはどういうことなのかを知ることができ。張りのあるすべすべした肌の女性から、重力に従い素直に垂れ下がったおっぱいを持つ女性や腰の曲がったおばあさんまで、その外見から、人間の一生の変遷を一瞬に

して目と頭で理解できるようになっている。

私も幼い頃銭湯に通った記憶がある。独特のざわめきともうもうと立ち上る暖かい湯気、お風呂からあがったあとのコーヒール牛乳の美味しさ。

妊娠した女の人をはじめて見たときは怖かった。何しろ人間とは思えないほど大きく膨らんだ腹と牛のように巨大な乳である。しかし、いつの間にかその人が小さな赤ん坊を連れてくるようになる。と、ああ、女性が妊娠して子供を生むというのはこういうことなんだなと当たり前のように感じるようになる。またあるときは、精神

のバランスを欠いたと思われる女性が銭湯で暴れるのに遭遇したこともあった。涙を流しながらわけのわからないことを口走る光景は確かに気味が悪かったし恐ろしかった。もちろん全裸だからその奇妙な様子はよい目に焼

つたのだ。

日本人は風呂好きだといわれる。その起源は光明皇后が皮膚病を患った1,000人の垢(あか)を洗い流したことにあり、と伝えられる。「施浴」「湯治」の言葉から見るとれるように、風呂

一昔前は皆銭湯に通った……



きついた。一緒にその場にいた誰かが、「あの人は気の毒な人なんだよ」と呟(つぶや)いた。きつと色々な事情があるのだらうと子供心にも思った覚えがある。5歳まで通った銭湯での体験は今思うと結構深いものがある。

は、銭湯に訪れる人々を歓迎する「湯女」の人氣が高まり多くの人々が集まった。この頃にはもう風呂に入ることは楽しみであり貴重なコミュニケーションの場でもあった。と想像できる。当時はもちろん混浴、明治23年に

7歳以上の混浴を禁止する法令が出るまで、その習慣は長く残っていた。一時は全国で18、000あった銭湯も内風呂の発達で激減し、今では約6、000までになった。経済成長と核家族の増加に反比例して銭湯は町から消えていったのだ。

余談だが、最近老若問わず衝動的な事件が多い。犯罪の原因を彼らの「心の闇」に求めようとする言動はあまりに短絡的である。そもそも「心の闇」という言い方が安易すぎる。むやみに過去を懐かしむことは慎みたいが、それにしても、だ。

私たちが得たものと失ったものはいったい何なのか。失ったのはモノなのか。慣習なのか文化なのか。それとも私たち自身なのか。考えても答えの出ない現実にも押しつぶされそうである。

イラスト・三浦義雄